いちじく畑の亡霊　　アルゼンチン

昔むかし、あるところに、年とった欲張りのお百姓がいました。お百姓は、りっぱないちじく畑を持っていました。

村の子どもたちは、いつもお腹を空かせていて、いちじく畑にしのびこんでは、よくうれたいちじくを盗んで食べていました、ときには、枝ごと盗んでいくこともありました。お百姓は腹を立てて、あるとき、鉄砲を手に、夜遅くまで畑を見張ることにしました。

子どもたちは、そのことを知って、相談しました。そして、夜になると、一番やんちゃな三人が、それぞれ、頭から真っ白なシーツをかぶって、いちじく畑に行きました。

おおかみの出そうなまっくら闇のなか、三人が畑に入って行くと、お百姓が鉄砲を持ってまちぶせているのが見えました。

深い静けさのなか、ひとり目の子が、あの世から出て来たような声でいいました。

「前を行く亡霊よ
いちじくの木に登りな」

お百姓は、白い亡霊におののき、二、三歩あとずさりしました。

すると、二番目がいいました。

「おれたちが、生きていたときにゃ、
このいちじくを食ったものだなあ」

お百姓は、またあとずさりしました。

そのとき、三番目が、お百姓をまっすぐ指さして、うつろな声でいいました。

「あの世へ行った今じゃ、
もっと歯ごたえのあるものが食いたいなあ」

お百姓は、鉄砲を放りだして、後も見ずに、いちもくさんに逃げていきました。

亡霊どもは、欲しいだけいちじくを食べました。お百姓は、もう二度と、死ぬまで、夜に畑へ行きませんでしたとさ。

おしまい

村上郁再話

資料『アルゼンチンの昔話』佐藤太吾・在田佳子・三原幸久編訳／三弥井書店